

## 巻頭言

本書は、大友信勝先生の研究生生活50周年のお祝いを機に、大学院ゼミ生（当時）による感謝の気持ちを少しでもお伝えしようと企画したものです。そして、この趣旨から寄せた論稿によって編纂されています。

恩師の大友先生は2012年3月末をもって、日本福祉大学、東洋大学等を経て、龍谷大学において定年退職を致しました。半世紀にわたって社会福祉分野に携わりつつ、社会福祉にとって何よりも重要な理念や価値を一貫して大勢の学生に教授してこられました。いまや大友先生から教わった理念と価値を受け継いだ大勢のゼミ生たちが日本をこえ、東アジア全域で活躍しています。とくに、社会福祉分野においては、社会福祉実践家はもちろん、先生と同様に社会福祉の人材育成をはかる研究者もいます。

大友先生から教わったのは、単なる社会福祉に対する知識や価値、理念だけでなく、ひとりの人間として、ひとりの研究者としてどう生きていくべきなのか、研究者としての生き方であったと思われます。

退職後でも、大友先生は、研究機関に所属し、現役なみの研究活動や社会活動等をなさっており、自ら率いて、われわれと共同研究や国内外の調査等を行い、より大きく成長できるようにご指導なさっておられます。このように、大友先生から言葉では言い表せないほど多くのことを学びました。

そのすべてを恩返しすることができません。弟子としてできることは、大友先生への感謝の気持ちをお伝えすることと、先生が大事にしてこられた社会福祉の理念や価値、生き方を受け継ぐことと、それを次世代に伝えることだと思われまます。

本書の構成は、第1部「社会福祉行政と貧困」、第2部「障害者の自立支援と課題」、第3部「高齢者福祉の論点と課題」、終章に「社会福祉研究・教育の歩み」の4部構成となっています。

第1部は、社会福祉の法的側面から捉える際の課題、生活保護行政の現状と進むべき方向性の提示、母子世帯・子どもの貧困問題の現状と実践に関する5

本の論稿が寄せられました。第2部は、障害年金に着目した国際比較を含む論稿が2本、障害者福祉政策の動向に関する検討、そして、障害者の自立に向けた実践的研究の論稿4本で構成されています。第3部は、高齢者福祉教育、高齢者施策、高齢者サービス等、国際比較の検討も含めた5本の論稿で、高齢者の福祉に関して、現状と課題、実践が示されています。このように、各部ではそれぞれの領域における理論、現状、実践について論じられています。そして、終章「大友先生の自分史」では、学生時代から現在まで、大友先生が社会福祉の道を選ばれた背景や学生時代に学んだこと、そして研究・教育者として50年間歩んでこられた価値や思想等が述べられています。そして、終章「社会福祉研究・教育の歩み」では、学生時代から現在まで、大友先生が社会福祉の道を選ばれた背景や学生時代に学んだこと、そして研究・教育者として50年間歩んでこられた先生の価値や思想が述べられています。

大友先生がこれまで旧産炭地域（筑豊）や中山間地域、あるいは、大都市公営住宅居住者調査、母子世帯調査等、実証研究を重視し、社会的に弱い立場の声に耳を傾け、その現状・実態を把握し、生活問題改善と解決に取り組まれた研究には、「社会福祉とは何か」を原点から追求する視点と方法が組み込まれています。現在における新たな貧困（生活）問題は経済的困窮だけではなく、社会関係の悪化や貧困の世代的再生産につながる重層化した問題を含み、社会的視点から取り組む方法を基礎においています。

大友先生は「底辺に向かう志」を大事にされておられますが、その根底には、個人の尊厳や社会正義、ソーシャルアクション、当事者主権といった社会福祉の基本的な価値と思想が深く根ざしており、それを貫くために権力にも抗する民主主義の価値と理念がありました。そうした思想と価値は、子どもの頃から受けた北方性教育（生活綴り方）と大学時代のセツルメント運動が基底にあり、高島進ゼミナールに入り、それを社会科学的に体系化する視点を学んだものと考えます。こうした、先生の研究姿勢や思想・価値に敬意を表し、本著のタイトルを『社会福祉研究のこころざし』としました。

本書は、貧困、障害者、高齢者といった各分野別それぞれのテーマは大学院時代に各執筆者が先生からご指導を受けたものです。そして、すべての内容は

先生が貫いてこられた思想と価値に基づいて論じられており、それが本書の大きな特徴といえます。

このような形で「社会福祉研究のころごし」が出版でき、少しでも大友先生に対する感謝の気持ちを表すことができ、大変嬉しいことです。この気持ちは、博士の学位取得後、急逝された故野中ますみ氏（龍谷大学で博士号取得）はもちろん、今回の刊行に参加することができなかった大勢の大友ゼミ先輩や後輩たちも同じだと思われまます。

ここまでたどり着くことができたのは、研究会や合宿を通して、惜しみないご助言をくださった「社会福祉原論研究会」皆様のご協力によるものであり、改めて感謝申し上げます。そして、当初の予定より遅くなり、各執筆者と先生にご心配をおかけした点においては、すべて編集委員の力不足によるものであり、お詫び申し上げます。

大友先生は、これからも人の生命を大切に、人間の尊厳を重んじ、社会的排除や差別のない、誰もが安全に安心して暮らせる福祉社会の実現にむけて揺らぎない信念のもと、社会的に最も弱い立場におかれている人々の生活問題改善・解決のため、研究及び社会活動をなさるでしょう。先生のますますのご健勝・ご活躍を心より祈念しております。

最後になりましたが、出版情勢が厳しい中、本著の刊行に特段のご配慮とご尽力をいただいた法律文化社の小西英央氏に、深く感謝申し上げます。

2016年12月

編集委員 権 順浩（代表） 船本淑恵 鵜沼憲晴